2018年度
国語
（問題）

＜H30122081＞

注意事項

一　試験開始の指示があるまで、問題冊子および解答用紙には手を触れないこと。

二　問題は2～9ページに記載されている。試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁および解答用紙の汚損等に気付いた場合は、手を挙げて監督員に知らせること。

三　解答はすべて解答用紙の所定欄に、HBの黒鉛筆またはHBのシャープペンシルで記入すること。

四　受験番号および氏名は、試験が開始されてから、解答用紙の所定欄に正確に丁寧に記入すること（左の記入例参照）。所定欄以外に受験番号・氏名を書いてはならない。

五　受験番号の記入にあたっては、左の数字見本にしたがい、読みやすいように、正確に丁寧に記入すること。読みづらい数字は、採点処理に支障をきたすことがあるので、注意すること。

（記入例）

５７００１番

⇩

万	千	百	十	一
5	7	0	0	1

（数字見本）

0	1	2	3	4	5	6	7	8	9

六　解答はすべて所定の解答欄に記入すること。所定欄以外に何かを記入した解答用紙は採点の対象外となる場合がある。

七　試験終了の指示が出たら、すぐに解答をやめ、筆記用具を置き、解答用紙を裏返しにすること。

八　いかなる場合でも解答用紙は必ず提出すること。

九　試験終了後、問題冊子は持ち帰ること。

一　次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

古代以来、漢文音読・訓読体が、日本における翻訳に及ぼしてきた影響とは別に、近代以後、西洋諸語からの翻訳は、日本語に新たな変革をもたらした。すなわち、「主語」と「文末語」とを持った「文」の形成である。それをここでは、一口に「主語」構文と名付けておこう。

①決定的な転機は明治二十年前後の大日本帝国憲法の作成過程で訪れた。

一八八九（明治二十二）年、近代日本で初めて発布された憲法は、ほとんどドイツ語原案の翻訳であった。当時、伊藤博文はプロイセンで、いわゆる王権神授説の保守的な憲法学を学び、ドイツ人法学者ヘルマン・ロエスエル（一八三四―一八九四）を内閣aコモンとして迎えていた。このロエスエルが、帝国憲法の原案を執筆したのである。伊藤たち憲法起草者は、このドイツ語草案の日本語訳に基づき、ロエスエルの助言を受けながら憲法を作ったのである。

帝国憲法の内容については、プロイセン憲法の影響であることが、従来から研究者によって指摘されているが、ここで問題にするのは、その文体である。

とりわけその多くの条文の冒頭の文句は、「何々ハ」で始まっていた。たとえば、

第一条　大日本帝国ハ万世一系ノ天皇之ヲ統治ス

から始まって、「天皇ハ…」、「帝国議会ハ…」などの文句が並んでいる。

これはドイツ語原案が、ドイツ語の主語で始まった文句に対応していたからである。つまり、単語の翻訳であると同時に、「主語」という構文の機能の翻訳であった。

西洋語の主語の翻訳に「何々ハ」を当てるという翻訳法は、近代以前の蘭学ですでに始まっていた。しかし、近代の憲法の文体の影響は圧倒的に大きい。事実上、西洋の主語を「何々ハ」とする翻訳法は、大日本帝国憲法から始まっていたと考えられるのである。

なお、例文の「何々ハ」のうちには、後の日本語文法では、すべて「主語」あるいは「主格」ではなく、主格が主題化したものや、②目的格が主題化したと扱われるものなどが含まれるのだが、私は、西洋語の主語の翻訳で出現した日本語の「何々ハ」は、すべて日本語における括弧（かっこ）つきの「主語」の出現であったと考えている。

そして、これ以後、「何々は」という文句は、翻訳文の主語であるだけでなく、近代日本語文における法律文、学術文などで、「主語」の資格で慣用的に多く使われるようになっている。

「何々は」という文体が、公式な文章で近代以後のこの頃初めて登場したという事情は、たとえば近代以前の法令の文章と比較してみれば［　A　］であろう。たとえば、七世紀の十七条憲法は「和を以て貴しと為し…」で始まっていた。また十七世紀の武家諸法度では「文武弓馬の道、専ら相嗜（たしな）むべき事」と述べていた。また近代初頭の五箇条御誓文では「広く会議を興し、万機公論に決すべし」となっていた。

ところで、ここで出現した「何々は…」という「主語」の文は③日本語の歴史上かつてない新しい機能を持っていた。

元来、「何々は…」という主格助詞の「は」は、古代以来の日本語である。しかし近代以後出現した「は」の用法は違っていた。大野晋の説明によると、たとえば、「昔々お爺さんとお婆さんがありました。お爺さんは…」のように、初めて出現する名詞は「お爺さんが」のように「が」で受けるのに対して、「は」は既出の名詞を受ける役割だった。

ところが、憲法の「は」は、「大日本帝国は」のように、当時の大多数国民にとって新しく出現した名詞を受

ける用法で使われていたのである。

以後この「は」は、法律文でも学術文でも使われるようになった。たとえば、「学問の目的は…」とか、「国家存立の目的は…」など、当時の学者の論文に盛んに使われている。

この新しい主格助詞「は」は、多数読者にとっては未知だが、書き手の著者には既出なのである。すなわち、大多数国民は知らないだろうが、法律制定者、学者である著者の私は知っている、だから教えてやろう、というような権力的背景からの発言を支えていたのである。

主語はまず述語の動詞に対応する行為者であり、行為する人間を表現する場合が多い。人間がこの世の舞台の中心存在であるという考えは、とりわけ、④近代以後の小説によって表現されてきた。西洋では近代以後、身分的制約から解放された無名の一市民を中心人物として人間を内面的に描く小説が書かれるようになり、広く支持された。ロラン・バルト（一九一五―八〇）は、三人称代名詞の使用によって、近代小説における主人公として無名の一市民が登場するようになったと説いている。たとえばフロベール（一八二一―八〇）は小説『ボヴァリー夫人』（一八五六―五七）を書いたのだが、フロベールは、たまたま新聞記事で失恋して自殺した一女性のことを知り、小説のテーマに取り上げ、「ボヴァリー夫人は私だ。」と述べていた。

無名の一市民は、西洋語では三人称代名詞で表現される。フランス語では il, elle だが、英語では、he, she である。近代日本の初期、西洋小説の影響を受けた日本では、西洋語の三人称代名詞の翻訳語として造語された「彼」、「彼女」を主人公とする小説が盛んに書かれるようになった。

たとえば一九〇四（明治三十七）年、尾崎紅葉（一八六八―一九〇三）は、小説『多情多恨』で、

彼は今其妻に死に別れた。

と書いていた。そして田山花袋（一八七二―一九三〇）は、一九〇七（明治四十）年、日本近代小説の先駆けとされる小説『蒲団』を、次のように書き出していた。

小石川の切支丹坂から極楽水に出る道のだらだら坂を下りようとして彼は考へた。「これで自分と彼女との関係は一段落を告げた。…」

こうして「彼」や「彼女」が日本の小説の舞台で活躍し始めるのだが、この言葉の機能が、あの明治憲法の「主語」と共通であるところに注目したい。すなわち、まず「彼」や「彼女」という漢字が、人間を指して使われるようになったのは、近代の翻訳以後のことであり、そもそも伝統的日本語文法に三人称代名詞という機能の言葉はなかったのであった。そして、近代小説に登場してきた「彼」や「彼女」は、読者にとってはいきなり未知の存在として立ち現れる。とくに小説が「彼」や「彼女」で始まっている場合がそうである。もちろん小説家にとっては既知の人物のはずで、それは小説の進行とともに次第に明かされていくのだが、重要なのは、一般読者にとって未知から始まる、という事情で、ここにはやはりある種の権力関係がある。

小説の中で「彼」や「彼女」は苦しみ、悩む、失恋もするだろう。小説作家自身、当時は社会的地位は必ずしも高くはなかった。しかし、bハクライの思想、芸術を熱心に求めていた若い読者たちにとって、小説は高級な文化であり、小説作家は、その高級文化の伝道者だったのである。

（柳父章「日本における翻訳」の文章による）

問一　傍線部a「コモン」、傍線部b「ハクライ」のカタカナにあてはまる漢字を**楷書**で記せ。

問二　傍線部①「決定的な転機」とは具体的に何を指しているのか。その説明としてもっともふさわしいものを次の**ア**～**オ**の中から**一つ**選び、その記号を記せ。

ア　日本が、それまでの封建社会から、憲法と議会制度を取り入れた近代社会に向けて方向転換をしていったということ。

イ　大日本帝国憲法の草案を作成する際に、ドイツ語の文体をもとにして具体的な文案が作成されたということ。

ウ　憲法草案のドイツ語を日本語に訳す際に、文章の意味のみではなく、主語という構文上の役割をも日本語に取り入れる形をとったということ。

エ　主語を文の中で明示する形の文体が、多くの人の参照するような権威ある文章の中で用いられ、公開されたこと。

オ　日本中の人々が従うべき統一的な規範が、憲法という文章の形をとってあらわれたということ。

問三　傍線部②「目的格が主題化したと扱われるもの」とあるが、そのような「何々は」の用例を、次の**ア**～**オ**の中から**一つ**選び、その記号を記せ。

ア　食事は私が作る。

イ　日本と西洋は異なる。

ウ　ボヴァリー夫人は私だ。

エ　公園は誰でも遊んで良い。

オ　国を治めるのは大変なことだ。

問四　空欄 **A** には漢字の四字熟語が入る。解答用紙の空欄に漢字を入れて、四字熟語を完成させよ。

問五　傍線部③「日本語の歴史上かつてない新しい機能」とあるが、その説明としてもっともふさわしいものを次の**ア**～**オ**の中から**一つ**選び、その記号を記せ。

ア　聞き手や読み手を、語り手よりも権威あるようにする機能であり、語り手の発言内容を、聞き手や読み手にとって価値ある、必要な知識として意味づける。

イ　聞き手や読み手に対して、語り手への共感を作り出す機能であり、語り手の発言内容を、誰しもが知っていることとして意味づける。

ウ　聞き手や読み手がしたがうような、権威を語り手に与える機能であり、語り手の発言内容を、誰しもが守るべき重要な約束事として意味づける。

エ　聞き手や読み手よりも優位に立った語り手を作り出す機能であり、語り手の発言内容を、多数の相手に理解され、知られるべき内容であるよう意味づける。

オ　聞き手や読み手と、語り手とを対等にする機能であり、語り手の発言内容を、聞き手や読み手とひとしく共有されるべき新しい知識として意味づける。

問六　傍線部④「近代以後の小説」とあるが、筆者はなぜここでそうした小説の事例を用いているのか。その理由の説明としてもっともふさわしいものを次の**ア**～**オ**の中から**一つ**選び、その記号を記せ。

ア　「何々は…」という「主語」の文章が、法律や学術の文章で用いられるようになったが、小説の文章ではあまり用いられなかったことを示すため。

イ　「何々は…」という「主語」の文章が、近代以後の法律用語と、小説ジャンルとの間で、相反するような役割を担っていったことを示すため。

ウ　「何々は…」という「主語」の文章が、どこにでもいるような無名の人物を、読者の共感を得るような魅力的な人物にすることができることを示すため。

エ　「何々は…」という「主語」の文章が、西洋の近代小説と、日本の近代小説で、異なる語り手の役割を作り出していったことを示すため。

オ　「何々は…」という「主語」の文章が、近代以後の小説ジャンルにおいて、登場人物を観察し、描き出す、権威ある語り手の機能を作り出していったことを示すため。

問七　本文の内容に合致するものを次の**ア**～**オ**の中から**一つ**選び、その記号を記せ。

ア　西洋語における主語を翻訳するときに、「何々は…」という訳語を用いる方法が、明治時代になって初めて生まれた。

イ　「何々は…」という表現は、近代以後において、それまでの話に出てきていた名詞を受ける形ではあまり用いられなくなった。

ウ　「彼」や「彼女」という漢字は、日本では古くは特定の人間をさす場合以外にも用いられていた表現であった。

エ　近代以後、西洋での小説で、無名の一市民が描かれるようになってくるのは、人間の平等という理念が尊重されたためである。

オ　明治時代の小説において、主語の明示は、その小説を書く作家に権威や価値を与えるような機能をもっていた。

二　次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

※この問題は、著作権の関係により掲載ができません。

※この問題は、著作権の関係により掲載ができません。

（中平卓馬『決闘写真論』の文章による）

注　ジャック・アンリ・ラルティーグ　二十世紀前半に活躍したフランスのアマチュア写真家。
J・リカルドウ　二十世紀後半のフランスの批評家。

問八　傍線部**a**「奔放」、傍線部**b**「鋳型」、傍線部**c**「旧態然」の読みを**カタカナ**で記せ。

問九　空欄 **A** に入るもっともふさわしい言葉を、次の**ア**～**オ**の中から**一つ**選び、その記号を記せ。

ア　情感
イ　視線
ウ　表現
エ　主観
オ　描写

問十 傍線部①「それが世界の暗号解読格子として働く」とあるが、その意味としてもっともふさわしいものを、次の**ア**～**オ**の中から**一つ**選び、その記号を記せ。

ア 世界が持っている意味をうまく読み解くには、世界はこうであるという主観に頼らざるを得ない。
イ 世界が持っている意味をよりいっそう理解するためには、あらかじめ解読の視点が必要である。
ウ 社会であれ自然であれ、そのリアルな姿に迫ろうとするのに、既成の概念や視点は不要である。
エ 世界を一種の暗号として見れば、それを読み解く格子となるものが必要である。
オ 社会であれ自然であれ、こうあるべきだという思い込みで見れば、そのように見えてしまう。

問十一 傍線部②「この関係を成立させるもののひとつに、どうやらリアリズムという呪文がある」とあるが、その説明としてもっともふさわしいものを次の**ア**～**オ**の中から**一つ**選び、その記号を記せ。

ア 世界を鋳型にはめようとする意志を根源的に問うことで、写真という表現手段に主観性や既成概念を増殖させてしまうのがリアリズムという言葉の呪文性である。
イ リアリズムを自称する写真には主観や既成概念が前提とされていないのに、それをあるかのように見せてしまうのがリアリズムという言葉の呪文性である。
ウ リアリズムを自称する写真には主観や既成概念が前提とされているのに、それをないかのように見せてしまうのがリアリズムという言葉の呪文性である。
エ リアリズムという言葉を根源的に問うことで、写真家―現実―読者（写真を見る者）という関係を成立させるのがリアリズムという言葉の呪文性である。
オ 報道写真や風景写真にはリアリズムの傾向が潜んでいるのに、そのことを解読格子を通したようにわかりやすくするのがリアリズムという言葉の呪文性である。

問十二 空欄 **B** に入るもっともふさわしい文を、次の**ア**～**オ**の中から**一つ**選び、その記号を記せ。

ア 世界と出会うことによって崩壊させ、
イ 写真を撮影することによって変形させ、
ウ 確固たる意志の欠如によって成立させ、
エ 写真を媒介とすることによって強化させ、
オ 真の解読格子と比べることによって修正させ、

問十三 傍線部③「意味としての現実」とあるが、「意味としての現実」が現れるのはいかなる時か。その説明としてもっともふさわしいものを、次の**ア**～**オ**の中から**一つ**選び、その記号を記せ。

ア 一本の木をいま見ていながら、これまで見たこともない木をそこに発見するとき、意味としての現実を見ている。
イ 一本の木をいま見ていながら、これまで木に対して抱いていた概念をそこに確認するとき、意味としての現実を見ている。
ウ 一本の木をいま見ていながら、これまで木に対して持っていた意味をそこで崩壊させるとき、意味としての現実を見ている。
エ 一本の木をいま見ていながら、これまで見たこともない木に向き合おうとするとき、意味としての現実を見ている。
オ 一本の木をいま見ていないのに、これまで見たこともない木をそこに見出そうとするとき、意味としての現実を見ている。

問十四　本文での著者の主張と**合致しないもの**を次の**ア**～**オ**の中から**一つ**選び、その記号を記せ。

ア　ジャック・アンリ・ラルティーグの写真には写真を撮るという確たる意志が希薄だが、逆にそこに写真というものの根源が示されている。

イ　報道写真や風景写真など、世の中でリアリズム的と思われている写真ほど、主観のフィルターを通して写されていることがある。

ウ　写真とは写した現実の似姿である以上、いかなる写真も写真であるかぎりにおいてリアリズムを実践している。

エ　リアリズムとは写真家と世界のあいだから、前もって設定された意味や概念を取り去ることで新たな世界を見ようとする姿勢である。

オ　われわれは日常的におびただしい量の映像情報にさらされているが、そこには眼に見えないコードが世界の解読格子として働いている。

〔以下余白〕

<H30122081>

受験番号	万	千	百	十	一
カナ氏名					
氏名					

（所定欄以外に番号・氏名を書いてはならない）

2018年度

国　語

（解答用紙）

No. 1 ／ 2

採点欄

一

問一

a

b

問二

問三

問四

一目

問五

問六

問七

（この線で二つ折りにして書きなさい）

二

問八

a

b

c

問九

問十

問十一

問十二

問十三

問十四

2018年度

国　語

（解答用紙）

No. 2 ／ 2

採点欄

（裏面使用不可）